

六月五日（月）

窓の外は、昨夜から猛烈な雨が降り続いている。朝方、亜衣を幼稚園に送り出す頃には少しマシになっていたけど、一人で留守番している間に雨脚は再び強まってきた。旦那と下の娘は、亜衣を送り出すタイミングで一緒に外に出て、今、自宅に居るのは私だけ。

電気も点けず、寝室に一人、ベッドの上で横になっている。家の中に響くのは、外で降っている雨の音と、遠くの方で仕事をしてきている冷蔵庫の音だけ。

時々、ブブブツとスマホのバイブレーションが短めに鳴る。通話じゃなくて、何かの通知。いちいち内容を確かめるのも億劫で、そのままほったらかしにして天井を見つめている。

梅雨時だから、雨も降る。強めの雨が夜通し降ることもある。でも、よりよってヘトヘトなタイミングで、強烈な低気圧を持ってこなくてもいいのに。家中に仕掛けた吸湿剤の働きも虚しく、高い湿気が肌に張り付いて息苦しさに拍車がかかる。

子供を連れ出す方が楽だろうと気を回してくれたんだろうけど、ありがたい反面、一人きりになる寂しさ、孤独さもある。とはいえ、もうそろそろお昼過ぎ。

亜衣が幼稚園から帰ってくる前には、旦那も映美も戻ってくるだろう。

もう少し横になって、グダグダしながらママをやるためのパワーを捻り出そう。気怠い女のまま、家族の前に、娘たちの前に姿を見せたくない。

試しに目を閉じてみる。微かな眠気はあるものの、寝入るだけの眠さじゃない。仰向けになったまま、しばらくゴロゴロしてみる。スマホのブブブも気になるけど、ここで画面を見ってしまうと寝れなくなる。グツと堪えて、力を抜く。あ、いい感じに寝れそうな気がする――。

ガレージに車が止まる音で、意識が呼び戻される。一瞬意識が飛んだ気がするけど、少しは寝れたんだっけ？ 枕元のスマホに手を伸ばし、時間を確かめる。午後一時を少し過ぎたところ。二〇分ちよつとぐらい、気絶するように寝てたのか。

ベッドの上で体を起こし、電気を点ける。三面鏡の前まで行って、自分の顔を

確かめる。少々むくんでいるような気はするけど、寝ぼけ眼と髪が膨れ上がっている程度。今日は外に出ないだろうし、顔を洗えば何とかなるか。

洗面所に向かって階段を降りると、帰宅済みの旦那と映美とが、リビングでアンパンマンを再生していた。まだ目はよく開かないけど、声だけかけておく。

「おかえり」

我ながらひどい声だと思っただけど、康德さんは微塵も嫌そうな顔をしないで、こちらを振り返って「ただいま」と言ってくれた。

「お昼、食べた？」

「まだだけど」

「母さんがお昼作ってくれたから、冷蔵庫から出して食べてよ」

彼は冷蔵庫の方を指した。扉を開けると、確かにビニール袋に包まれたタツパーが入っている。

「亜衣のお迎えも僕が映美と行ってくるし、ゆっくりしててよ」

彼は私の「ありがとう」を待たず、目の前のタブレットに視線を戻した。映美と一緒に、アンパンマンの世界を楽しんでいる。体調が悪い時に、自分以外の人ที่บ้านにいる。煩わしいこともあるけど、やっぱりコレがいい。

私はとりあえず洗面所に足を運んだ。顔を洗って、お昼を食べよう。できる範囲で、ママをやろう。冷たい水を滴らせながら、鏡の中の自分に笑いかけてみた。

初出 令和三年五月二一日 アルファポリスにて公開